人文科教育研究　25　1998年　pp. 153－163

資料

滑川道夫読書指導論の成立史

足　立　幸　子

はじめに

本稿は，出版された著書のみならず，滑川の行っていた諸活動，教師あるいは研究者としての立場の変化，影響を受けた人物との出会い等を視野に入れながら，滑川道夫読書指導論の成立過程を記述することを目的とする。特に，滑川が生活指導の一環として読書指導を認識するようになった過程に焦点をあてる。その際，教え子や同僚の教師等の滑川と関係のあった人物へのインタビュー，教え子が当時のことを回想して記した文集，滑川の勤め先であった成蹊小学校・成蹊学園教育研究所関係の資料，滑川が推進した研究会の活動を記した内部資料など，収集したものを交えて記述する。（なお，協力してくださった方々の敬称は略させていただく。）

1．準備期

滑川道夫は明治39年に秋田県湯沢町に生まれ，父道太郎が教師をしていたこともあって，幼い時から教師を志していた。大正15年３月に秋田師範学校を卒業し，同年８月まで短期現役兵として入営後，９月より秋田湯沢女子小学校の訓導として教師生活を始める。当時，湯沢女子小学校では研究活動が盛んであった。滑川は先輩の教師に薦められた本を読んだり，研究会に出席したりしていく過程で，綴方教育に関心を持つようになる。研究会では，綴方教育における生活指導の問題などが取り上げられていた。滑川は昭和２年に同僚の教師伊藤養助と学校文集「わかな」を編集・発行し，学級文集「文と詩」を作成し，綴方の研究授業を行い，綴方を通して生活指導を実践した。滑川は後年，読書指導を「読書による生活指導である」と述べている。その生活指導の追究は，この頃より始められた。昭和３年，滑川は秋田師範学校専攻科に籍を置き，翌年には秋田師範学校第一附属明徳小学校に赴任し，綴方教育研究部の主任となる。明徳小学校は秋田県下の研究活動を先導する役目を負った学校であった。滑川は県下の綴方教育研究の推進者としての役割を担わされたのである。昭和４年の第２学期に，子供の綴方の雑誌を作成することについて，成田忠久が，面識がなかったにもかかわらず滑川の下宿を訪ねて相談したのは，滑川の名が綴方教育研究に詳しい教師として知られていたことによる。滑川は西原慶一などの綴方教育に関する理論書からも影響を受けた。滑川が西原に感想や疑問を書き送ったのを契機とし，２人の間に交流が生まれた。やがて，滑川は西原の勧めで最初の著作『文学形象の綴方教育』（人文書房，昭和６年）を出版することとなる。これは，『北方教育』に書いた論文，『綴方生活』に投稿した「調べた綴方」などの綴方の実践をまとめたものである。文芸主義的綴方を批判し，生活主義綴方の上で生活指導を行おうとしたものであると要約することができるであろう。生活綴方に

よって，滑川は，現実の生活に根差し，子供自らが現実の生活を切り拓いていく「生活指導」の必要性を認識するようになる。

しかし，滑川が，生活綴方の実践の中で行った生活指導が読書においても適応可能であるということに気づくには，さらにいくつかの契機が必要であった。すなわち，学校図書館運営，児童文学者山本有三との出会いなどである。児童文化については別の機会に論じた（足立，1998）ので，ここでは校内で行っていた読書に関係する活動と，山本有三からうけた影響とについて詳しく述べることにする。

滑川は，西原の勧めで昭和７年に上京し，私立成蹊小学校の訓導となる。成蹊小学校は当時の小学校には珍しく学校図書館（児童図書館と呼ばれていた）を所有していた。滑川は西原に依頼されて学校図書館の運営にあたった。滑川は，この経験から読書指導に関心を持ち始めた[1]。一方で，滑川は学級担任としてもいくつかの読書指導の試みを行っている。成蹊小学校は，１学年２クラスであり，原則として同じ学級担任が６年間持ち上がることになっている。そのためその教師独自の教育実践を自由に展開することができたという[2]。昭和７年に赴任した当時，滑川は５年生の学級担任となる。後に詳述するが，山本有三の長男，有一がこの学級にいた。有一の学年を卒業させた滑川は，昭和９年４月から昭和15年３月までの６年間と，昭和15年４月から昭和21年３月までの６年間（ただし，昭和19年から20年にかけては疎開学園となったため，それまで隣の学級に所属していた児童についても，滑川が担任の役割を担うこととなった），２つの学年の学級担任となった。昭和９年に入学した緒方四十郎や粟飯原景昭は，滑川が読み聞かせをしていたという記憶を持っていた。また緒方は自分が家庭で読んでいた本について，母親を通じて滑川の知るところとなり，本を紹介されたことを覚えている。しかし，本格的な読書指導をしていたというよりは，一緒に行っていた野球や，夏の学校と呼ばれる宿泊訓練の印象のほうが強いと述べている。同僚の教師の亀村五郎によれば，滑川が生活指導と読書を結び付けて本格的に読書指導に取り組む契機を提供したのは，山本有三と出会いであるという。

山本有三は，『路傍の石』『真実一路』などで知られる作家である。前述のように，滑川は有三の長男，有一の小学校５・６年の学級担任であった。山本有三記念館には，「滑川先生のおっしゃることをよく守りなさい」という趣旨の，有三が有一に宛てた書簡が残されている。しかし，成蹊小学校は当時家庭訪問を禁止していたため，滑川が直接有三に面会したのは，有一卒業後であった。山本家は昭和11年に東京・三鷹に転居している。有一の妹である永野朋子の記憶によれば，転居後，滑川が度々訪問するようになったという。『新潮日本文学アルバム〈33〉山本有三』には，山本邸の庭で会談する有三と滑川の写真が掲載されている。有三は一流の作家であるばかりではなく，児童文学や少年少女向けの文学にも深い理解を示していた。有三との出会いを通して，滑川は児童読物に一層興味を持っていく。長男有一のような少年に読ませる良心的な本が少ないと考えた有三は，『日本少国民文庫』（全16巻，昭和10年11月～昭和12年８月，新潮社）を監修する。子供の図書の改善を願う有三にとっても，日々子供の教育実践に携わっている滑川の訪問は望むものであったに違いない。折しも，昭和14年から滑川は文部省社会教育局嘱託の推薦児童図

書調査員として，児童図書の出版状況を調査する立場になる。滑川は有三から影響を受け，子供にとって良心的な質の高い本を出版すること，さらには児童文化そのものの向上の重要性を認識する。児童文化への関心から触発されて，滑川は読書指導論を構想するようになっていった。滑川が最初に読書指導について論じた論文は『児童文化論』（国語教育学会編，昭和16年，岩波書店）所収の「児童文化と国語教育」である。この論文は，読書指導に関する題目ではないために，読書指導の著書としては数えられないが，滑川が児童文化への関心から，この頃既に読書指導論成立に向けての準備を進めていたことを示すものである。「生活指導」の中に児童読物を含めて考えるという視点，すなわち，児童読物を通しての生活指導が読書指導になるという視点を，滑川は有三との出会いによって得たのである。滑川は成蹊小学校において学校図書館の運営に携わってきた。さらに有三の「三鷹少国民文庫」によって学校外の読書指導を経験する。「三鷹少国民文庫」とは，有三が三鷹の自宅の蔵書約１万冊を近所の子供達に公開したものであり，空襲の影響を受ける昭和19年２月まで存続した。滑川は，この文庫の仕事を手伝って，学校外における読書指導の重要性に気づく。学校内での読書指導も重要であるが，本来子供の読書生活は学校外の生活にも結びついている。学校だけではなく家庭や地域における読書も同様に重要であるということを体験したのである。子供を学校の中に閉じ込めず，子供を社会的存在者[3]として認め，学校・家庭・社会が一体となっての生活指導を読書という形で行っていこうとする方針が，ここで生まれたのである。

２．成立期

前述のような経緯があり，滑川は有三とともに活動することが多くなっていった。有三は，滑川に，有三監修の少年少女雑誌『銀河』の編集長を依頼する。有三としては，滑川のような子供の本に造詣の深い人物に編集長を専任で務めてほしいと願っていた。しかし，そのためには滑川は成蹊小学校を辞めなければならない。幼い頃から教師になることを目指して，教育実践に生きがいを感じていた滑川は，教師を辞めて編集長になることはできなかった。それでも，編集長に適した人材を探す間，創刊号（昭和21年10号）から第５号（昭和22年２月）まで，実質的に編集長の役割を担う。滑川は，子供の生活を背後から支持する児童文化に関係する仕事にも関心を持っていたが，教師以外の仕事に就く気持ちにはなれなかった。ちょうど時期を同じくして（昭和21年），滑川は成蹊小学校の主事に就任する。主事というのは公立学校でいうところの校長にあたる職であり，教師の指導と学校の運営を全面的に担当するものである。そのような重要な任務についた滑川が編集長を引き受けるわけにはいかなかったのである。滑川は，有三の仕事に理解を示しながらも，教師として生きることを決心し，教師という立場で読書指導論を構築する道を選んだのである。

主事となった滑川は，校内において読書指導の実践を活発にしていく。先にも触れたように，成蹊小学校には学校図書館があった。しかし戦後主事となった滑川は，学級内での読み聞かせにとどまらず，学校全体で，あるいは学校外での教育活動も含めて，読書指導を行う機会を取り入

れる教育課程を構想した。まず，教科教育と教科外教育の統合を目指した「生活教育」を掲げ，日常生活課程（自治活動，行事教育，図書館学習），生活学習（社会，自然における主要な経験領域についての学習活動），基礎学習（基礎的技能や基礎的知識の系統）の３つの教育課程を示した。雑誌『生活教育研究』はこのような成蹊小学校での実践を世に問うたものである。全課程に織り込まれた読書指導の実践は，後に，成蹊小学校読書研究会編『読書指導の実践』（昭和26年，牧書店），『読書指導の展開』（昭和31年，牧書店）にまとめられることになる。編者名は同僚の谷川澄雄によれば，成蹊小学校読書研究会という組織があったわけではなく，折に触れて教師が実践したものを書物にまとめる際につけた名であるという。『読書指導の実践』の序文で滑川は以下のように述べている。「読書力を育成することは，国語科の主要な任務の一つである。けれどもそれは，限定された国語教室や国語の時間のみで達成でない。あらゆる教科の学習指導にしみこんで行われなければならない。ということは，子どもの生活の中に根ざした読書指導にこそたよらなければならないという考え方を導びくわけである。そこに子どもたちの生活環境の一つとしての学校図書館の問題が浮かびあがってくる。国語科学習における読解指導を基礎的にふくんで生活的に拡げられ充実されていく読書指導に目をそそぐとき，教育全課程の問題としてとりあげられる。」[4]これらの２冊の中では，単元の実践例の紹介，社会科や健康教育における読書指導の研究などが，教師によって示されている。

これらの読書指導の実践の先導的役割を担いながら，滑川は一方で読書指導の理論を構築していく。まず，昭和24年に『こどもの読書指導』（国土社），25年に『青少年の読書指導』（国土社）を発表する。本来この２冊は，１冊で出版される予定であった。執筆の直接の契機となったのは，昭和24年に千葉県で開催された『学校図書館の手引』講習会における講義である[5]。滑川が『学校図書館の手引』の編集委員に選ばれたのは，前述のように，成蹊小学校で学校図書館を運営し，有三の「三鷹少国民文庫」に協力し，学校図書館や読書指導の問題に見識を深めていた滑川を，ＣＩＥ（民間教育情報局）が抜擢したためである。したがって，この２冊においては，生活の環境としての学校図書館や公共図書館が重視されている。また，昭和29年には『子どもの読書をどうみちびくか』を出版している。これは，「『子どもの読書をどうみちびいていったらいいか』を，俗悪児童読みものへのたたかいを主流にして，学校図書館の面から，国語教育の面から，文学教育の面からこころみ」[6]たものである。「けっきょく，読書指導は，生活指導の一つの分節であるから，個人の生活に即して行わなければ，ほんとうの指導にならない」[7]，「読書指導ということを，読書することの直接的な指導，つまり読む技術の指導といったせまい意味に限定すべきではない。読書に関する生活の指導，生活の中の読書の指導として考えなければならない。『読書』による生活教育といってもいいし，またそう考えなければ，ほんものにならないように思う。」[8]という文章が示しているように，生活指導を中心に据えようとする滑川の読書指導論の原理はこの著書でほぼ成立したとみてよいであろう。そして，昭和32年に出された『国語教育辞典』（編集代表西尾実，朝倉書店）で，滑川は「読書指導」の項目を執筆している。この項目で滑川は自分の読書指導の定義を明らかにする。「読書による生活指導をいう。読書と現代社会生活とは切り離

すことのできない関連がある。自己の人生を読書によって充実させ，現代社会生活に適応する読書力と，読書による人格の形成を具案的・計画的に助成する指導である。」[9]という。以後の著書においても，この定義は変更されることなく，用いられている。以上のことから，滑川の読書指導論がこの時点で成立していたことが窺える。

3．展開期

昭和31年４月，人事問題に絡んで，滑川は成蹊小学校主事を辞任し，成蹊学園教育研究所所長に就任する。同じ学園内の異動とは言え，教育実践の現場を離れるわけであるから，滑川が望んだものではなかった。教師として生きようと決意していた滑川の１つの転換点となったことは想像に難くない。後年滑川は，「顧みると，私が成蹊小学校を去って，成蹊研究所所長となった時点，つまり，小学校の児童から離れる時点で第一の人生は終わり第二の人生にはいったのであった。第二の人生は教育研究生活である。」[10]と述べている。読書指導の実践の場を失った彼は，新たな形式での実践の場を作っていこうとする。それが読書指導研究会の発足である。

前述のように，辞典の「読書指導」という項目の執筆を引き受けるほど，滑川は読書指導に見識のある人物として認識されていた。このような滑川のもとに昭和31年８月，今村秀夫ら５名の都内小中学校の教師が，寄り集まった。子供の読書指導について本格的に研究するため指導をしてほしいと言う。５名の教師は滑川の考え方に賛意を持っていた。滑川は快く会長を引き受けた。滑川にとっても，研究会は自らの読書指導の理論を実践できる絶好の機会であった。

読書指導研究会[11]の活動について，今村秀夫によって提供された資料[12]に基づき，やや詳しく記すことにする。まず，研究会の発足に際して，①共同研究を中心とすること，②15～20名の会員を限度にして月例研究会を行うこと，③デパート伊勢丹書籍売り場の児童図書選定に協力すること，の３点が申し合わされたという。会員はほとんどが都内の小中学校の教師である。会員は，読書指導について以下のような共通見解を持っていた。読書指導は「ひとりひとりの子どもたちの当面している生活の現実に深く関連し，子どもたちの認識の発達に照応しながら，読書活動を通して，正しいものの見方，感じ方，考え方を育て学びとらせるもの」[13]であるという。今村によれば，この共通見解は，滑川の読書指導論に基づいているという。主な活動は，『読書指導のしおり』（季刊）の編集，『よい本のリスト』（年刊）の発行，児童雑誌の検討（月１回），読書相談（月２回），読書指導講演会の開催，児童文化教室の開催などである。これらの活動のうち中核に据えられたのは，昭和35年以降滑川が委員を務めていた「よい本をすすめる委員会」と合同での，児童図書やＰＴＡ向き新刊図書の選定作業と児童雑誌の検討である。結果は，『読書指導のしおり』『よい本のリスト』に示された。読書相談とは，昭和33年より隔週（後に毎週）土曜日の午後，伊勢丹書籍売り場に子供の読書の相談所を設け，父母の相談に会員が交代であたるというものであった。読書指導講演会は，昭和34年から年１～２回の割合で，伊勢丹ホールを会場に父母・教師を対象として行われた，一種の公開講座である。石井桃子，村岡花子らの児童文学者が講師となった。児童文化教室とは，昭和38年以降，夏休みや春休みに，子供の参加者を募集し開

催された。ゲーム・スライド・詩と作文・版画・読書・プラモデル・切手・集団絵画・かげ絵・美術・児童劇・放送・音楽・ケンビ鏡・写真・話し方・マンガ等々の教室がある。講師及び協力者の名前としては，藤田圭雄，渡辺茂男，板倉聖宣，壷井栄，手塚治虫，早船ちよ，清水慶子，石森延男，椋鳩十，神宮輝夫，庄野英二，いぬいとみこ，斎藤佐次郎，無着成恭，菊池直子，鈴木松雄，荒正人，小峰広恵，原田美房，後藤竜二，平石元昭，Alice Lohrer，Georgia L. Sealoff，沢辺喜久子，大倉玲子，福田清人，武市八十雄，松居直，石森延男，箕田源二郎，大田耕士，木俣武，吉沢映子，冨田博之，永井昭三，秋田道子，平野道子，中沢孚旨子，水野良平，堀山欽也，太田浪三，広瀬鉄雄，秋玲二，吉沢章，大橋富貴子，牧野茂，王貞治，沼田定次，栗原一登，扇谷正造が挙げられている。研究会では，これら一流の講師陣によって一流の文化を子供に伝えようとしたのである。興味深いのは上記の諸活動が読書指導研究会の活動の一環として行われたことである。これらは，児童文化の向上が子供の生活指導になるという考え方を当時の滑川の立場で実践したものとみることができる。また月例研究会では，共同研究のテーマを決定し，会員の立場に応じて学校現場での実践や研究の分担をし，結果を持ちよって討議を重ねた。場所は滑川の自宅が使われた。滑川がいかにこの研究会を大切に考えていたかが想像できる。テーマは，「子どもマンガの問題」「テレビジョンと子どもの問題」「子どもの伝記読み物」「作品研究（『星の王子さま』『トム・ソーヤの冒険』など）」「学校，家庭での年代に応じ生活に根差した読書指導法」などであった。共同研究の成果は，『マンガと子ども』（昭和36年，牧書店）[14]，『テレビと子ども』（編集協力，昭和36年，牧書店）[15]，『少年少女のための文学案内』（全３巻，昭和37年，牧書店），『家庭の読書指導』（昭和45年，国土社），『学校の読書指導』（昭和48年，国土社），『学級の読書指導』（昭和48年，国土社）などの図書として出版された。今村によれば，これらの出版で得た収益を次の研究の費用にしたという。また，選定・推薦のための図書は伊勢丹が提供し，充実した研究が重ねられたという。このような読書指導研究会の幅広い活動が意味しているものは，滑川が行おうとした生活指導が広い範囲に及ぶものであったということである。繰り返しになるが，滑川は子供を社会的存在者とみなし，学校内だけでなく社会の中でも，子供を育てようとした。その構想の一部として，読書指導研究会の活動があったのである。

成蹊学園教育研究所は昭和36年に閉鎖されるが，その後も滑川は教育研究者として生きようとする。読書指導研究会の活動の一方で，昭和40年代から50年代にかけて読書指導の理論書も執筆していく。『読解読書指導論』（昭和45年，東京堂）は，昭和41年から45年までの東京教育大学講師時代の論考を中心にしており，読解指導と読書指導の関連が盛んに論じられている時期に出されたものである。この著作の中で滑川は「『読解』は読む機能であり，『読書』は読む行為である。読解のない読書は成り立たないし，読書という行為を通さない読解も成り立ち得ない。」という見解を示した。そして最後に，滑川は前述の読書指導研究会での活動を踏まえ，「いま，子どもたちが，学習に追い立てられ，テレビとマンガに息ぬきをつよく求めている現実の生活に目をそらしてはならない。生活から目をそらして『本と子ども』だけの関係できれいごとの読書指導をこころみても効果があがるはずがないからである。ひろい生活指導の一環としての読書指導という真

意もそこからわきあがってくる。」[16]と述べている。また，昭和51年には，読書指導論「全業績の頂点に位置するもの」[17]と言われる『現代の読書指導』（明治図書）を，さらに昭和54年には，『映像時代の読書と教育』（国土社）を出版した。この２冊も，さまざまな映像文化が発達してきた現代生活における読書とその指導を論じたものであった。

おわりに

本稿では，滑川の行っていた諸活動，立場の変化，影響を受けた人物との出会いなどに焦点をあてて，滑川読書指導論の成立過程を記述してみた。特に，あまり公になっていない資料に重点をおいた。筆者にとって最大の関心事は，生活指導の一環と考える読書指導観がどのように生まれてきたかということである。滑川はかなり早い時期から生活指導に対して意見を持ってきたが，戦前に山本有三と出会って読書においても生活指導が必要であることに気づいた。あらゆる教育課程の中で読書指導を行うことを提案した。さらに現代という時代・社会の中で生活指導としての読書指導を構想していったという過程がみえてきた。

滑川は具体的な読書指導の実践を視野に入れながら，読書指導の理論を発表していった。その実践の規模も立場によって変化した。本稿では滑川の読書指導論の成立過程を，準備期，成立期，展開期の３つの時期に分けて論じた。滑川自身の読書指導がどのような規模で行われていたかに着目すると，一人の教師として教室の中で読書指導を実践した時期（準備期），主事となり学校全体で読書指導に取り組んだ時期（成立期），研究会を発足させて学校外の読書指導を試みた時期（展開期）があったと言うことができるかもしれない。それぞれの実践に応じて，成立期には学校全体で行う読書指導の理論が，展開期には現代社会を視野に入れた読書指導の理論が構想されたのである。

謝辞

本稿をまとめるにあたって，山本有三の長女で有三と滑川の関係について話してくださった永野朋子氏，三鷹市山本有三記念館の品川洋子氏，滑川の読書指導論研究全般にわたって資料や助言を提供してくださった元成蹊小学校教師の谷川澄雄先生・亀村五郎先生，読書指導研究会についての市販されていない内部資料や情報を提供してくださった今村秀夫先生，成蹊学園史料館の方々，成蹊会の根岸孝彰氏，成蹊小学校図書館を案内してくださった成蹊小学校教頭の岡崎忠彦先生に心よりお礼申し上げます。

注

（１） 滑川（1976），１頁。
（２） 永野朋子，緒方四十郎，稲垣友美らのインタビューによる。
（３）「社会的存在者」についての考察は，足立（1998）において行った。

（4） 成蹊小学校読書研究会（1951），1頁。
（5） 滑川（1949），2頁。
（6） 滑川（1954），2頁。
（7） 滑川（1954），6頁。
（8） 滑川（1954），21頁。
（9） 滑川（1957），478～479頁。
(10) 滑川学級卒業生（1987），10頁。
(11) 読書指導研究会では会員を月例研究会に参加できる在京の15名～20名に限定していたために，昭和37年には，全国的な規模で会員を募集した日本読書指導研究会を発足させた。日本読書指導研究会では滑川が会長，今村が事務局長を務め，読書指導研究会からの会員は常任委員となった。
(12) 巻末，引用及び参考文献・資料の(2)の「読書指導研究会・日本読書指導研究会関係資料」を参照。
(13) 「読書指導についてのアピール」より引用。
(14) 著者は代表して滑川の名になっているが，会員の分担執筆である。
(15) この本も著者は代表して滑川の名になっているが，会員の分担執筆である。
(16) 滑川（1970），269頁。
(17) 野地（1978），102頁。

引用及び参考文献・資料

（1）文献

西原慶一（1929）『綴方新教授原論』
成田忠久（1930－1936）『北方教育』創刊号～第16号，北方教育社
小砂丘忠義（1931）『綴方生活』（滑川の実践掲載の昭和6年6月号，8月号，9月号）文園社
滑川道夫（1931）『文学形象の綴方教育』人文書房
山本有三監修（1935－1937）『日本少国民文庫』（全16巻）新潮社
国語教育学会（1941）『児童文化論』岩波書店
山本有三編集顧問（1946－1948）『銀河』創刊号～第3巻第12号　小学館
成蹊小学校教育研究所（代表滑川道夫）（1947）『生活教育研究』第1集～第2集　小学館
文部省（1948）『学校図書館の手引』師範学校教科書株式会社
滑川道夫（1949）『こどもの読書指導』国土社
滑川道夫（1950）『青少年の読書指導』国土社
成蹊小学校読書研究会（1951）『読書指導の実践』牧書店
滑川道夫（1954）『子どもの読書をどうみちびくか』牧書店

成蹊小学校読書研究会（1956）『読書指導の展開』牧書店
滑川道夫（1957）「読書指導」西尾実編集代表『国語教育辞典』朝倉書店
滑川道夫（1959a）『読書指導』牧書店
滑川道夫（1959b）『山本有三読本―その生涯と作品―』学習研究社
滑川道夫（1961a）『マンガと子ども』牧書店
滑川道夫（1961b）『テレビと子ども』牧書店
日本作文の会（1962）『北方教育の遺産』百合出版
日本読書指導研究会（1962）『少年少女のための文学案内』（全３巻）牧書店
滑川道夫（1970）『読解読書指導論』東京堂
滑川道夫（1970－1971）「『北方教育』創刊前後（連載）」『国語の教育』第29号～第36号
日本読書指導研究会（1970）『家庭の読書指導』国土社
日本読書指導研究会（1973a）『学校の読書指導』国土社
日本読書指導研究会（1973b）『学級の読書指導』国土社
滑川道夫（1976）『現代の読書指導』明治図書
野地潤家（1978）「読書指導個体史―滑川道夫氏のばあい―」『個性読みの探究』共文社
滑川道夫（1979）『映像時代の読書と教育』国土社
永野　賢（1986）『新潮日本文学アルバム〈33〉山本有三』新潮社
滑川道夫（ききて冨田博之）（1993）『体験的児童文化史』国土社
足立幸子（1997）「滑川道夫読書指導論への成蹊教育思想の影響」日本読書学会『読書科学』第161号
足立幸子（1998）「滑川道夫読書指導論における児童文化的視点」筑波大学国語国文学会『日本語と日本文学』第26号

（２）記念誌及び出版されていない資料等

●滑川の研究発表資料

滑川道夫（1930）『綴方教育研究発表』（研究会の際に配布したと思われる手書きの印刷物）
秋田県師範学校第一附属小学校（1930）『体系的行の教育形態』（研究会の際に配布したと思われる印刷物，同校教師の分担執筆）

●成蹊小学校卒業生資料

成蹊小学校創立50周年記念誌編集委員会（1965）『成蹊小学校五十年のあゆみ―創立50周年記念誌―』成蹊小学校
滑川道夫学級卒業生（1987）『欅並木の光と影―滑川道夫学級文集―』
成蹊学園史料館（1994）『成蹊学園史（資）料一覧』（同館司書用目録）
記念誌編纂委員会（1995）『こみちのあゆみ―創立80周年記念誌―』成蹊小学校

●山本有三・三鷹少国民文庫関係資料（主に山本有三記念館所有）

山本有三記念館パンフレット類

山本有三記念館所有の書簡（有三より有一に宛てたもの）

婦人公論誌記者（1935）「隣組で共同の読書を―山本有三氏宅の少国民のための図書室を訪ねて―」『婦人公論』第28巻第３号

都立教育研究所分室，有三青少年文庫・教育相談所（1959）『月刊ニュース』第８号

東京都立教育研究所分室，有三青少年文庫（1960）『読書指導』都立教育研究所

都立教育研究所三鷹分室（1961）「読書指導―読書入門期の指導とその方法―」

「東京都立教育研究所三鷹分室有三青少年文庫」（1961）『ひびや』第38号（東京都立日比谷図書館報）

●読書指導研究会・日本読書指導研究会関係資料（主に今村秀夫提供）

読書指導研究会編「読書指導のしおり」第７集，

「よい本―読書指導のしおりNo.53―」第53号（終刊号）

日本読書指導研究会規約

1968年度日本読書指導研究会 組織・運営・活動方針案（1968年５月23日，企画委員会）

「読書指導についてのアピール」（1968，日本読書指導研究会の宣言文）

「日本読書指導研究会会報」第１号（1966.11），第２号（1967.3）

『いせたん　ひまわり』第１号（正確な年号は不明だが，1964年もしくは1965年であろう。児童文化教室の写真や父母・講師の感想文等を掲載している。）

今村秀夫作成「滑川道夫著作目録」（３枚，合計99点の著作が挙げられている。）

「第十三回巌谷小波文芸賞・第三十回久留島武彦文化賞贈呈式次第」（伊勢丹書籍部が受賞したときのもの）

「第30回久留島武彦文化賞候補者推せん書」（同上，滑川の直筆）

Reading Guidance（今村秀夫慶応大学時代の授業のレジメ。滑川の読書指導観に理解を示した証拠として）

『読書指導研究』（読書指導研究会の活動，出版物，関係者名簿，資料一覧を示したもの。計６枚）

（３）インタビュー等

1997年７月１日，根岸孝彰（社団法人成蹊会常務理事）

滑川の教え子の氏名や住所，及び同僚の教師についての情報を得る。

1997年７月１日，岡崎忠彦（成蹊小学校教頭）

成蹊小学校学校図書館（児童図書館）の存在を尋ねる。成蹊小に残されている読書指導関係の資料をコピーする。成蹊小学校で現在行われている読書指導についての説明を受け，読書指導の授業を見学する。

1997年７月７日，谷川澄雄（元成蹊小学校教師）

成蹊小学校の活動及び，滑川の読書指導論に関する活動全般について聞く。『よい本のリスト』等を提供していただく。

1997年７月８日，根岸孝彰

滑川学級卒業生緒方四十郎・粟飯原景昭が成蹊会誌に寄せた原稿，同窓会での講演記録等のコピーを提供していただく。

1997年７月11日，緒方四十郎（滑川学級昭和15年卒業生）

滑川学級における読書指導実践の記憶，成蹊小学校の学校組織について，卒業後の滑川との交流について聞く。

1997年７月11日，緒方四十郎

葉書により昭和21年卒業生島久代を紹介。

1997年７月16日，亀村五郎（元成蹊小学校教師）

滑川の読書指導論全般について意見を聞く。山本有三の影響について指摘をうける。

根岸孝彰，手紙で山本有三関係者の情報を得る。

1997年７月18日，島久代（滑川学級昭和21年卒業生）

戦時中疎開学園における学級担任としての滑川の活動等について聞く。

1997年７月22日，永野朋子（山本有三長女）

滑川と有三の関係について聞く。

1997年７月23日，稲垣友美（元成蹊小学校図書館担当の教師）

戦前戦後の学校図書館の運営及び学級での読書指導実践等について聞く。

1997年７月24日，品川洋子（三鷹市芸術文化振興財団，山本有三記念館担当）

山本有三記念館所有の資料等を見せていただく。

1997年８月６日，粟飯原影昭（滑川学級昭和15年卒業生）

昭和９年，15年，21年卒業生による回想文集『欅並木の光と影』を提供していただく。滑川学級における読書指導実践，特に読み聞かせの実践について聞く。

1997年８月10日，今村秀夫（元日本読書指導研究会事務局長）

読書指導研究会発足の過程や研究活動について聞く。研究会に関する多数の内部資料を見せていただり，複写させていただいたりする。

1997年８月15日，粟飯原影昭

小学校卒業後の滑川との交流の様子，及び卒業後の滑川の活動について聞く（卒業したと言っても，成蹊中学校は小学校と同じ敷地内にあり，滑川の活動を見聞きすることができた）。